

積分方程式法によるシェルの解析

京都大学工学部	正員	丹羽 義次
京都大学工学部	正員	北原 道弘
日本道路公団	正員	○中村 雅彦

1. はじめに

本研究は、薄板およびシェルの解析に、積分方程式法を適用する試みの一環として、薄い偏平殻の理論にちびいて、開孔を有する円筒殻の応力集中問題を積分方程式法で定式化し、数値解析を行なったものである。なお、離散化において、未知量および積分核を周期3次BSpline関数で近似し、精度の向上および計算時間の短縮をはかった。

2. 基礎方程式と境界条件

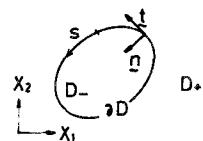
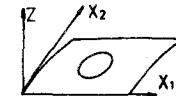
薄い偏平殻の理論によると、物体力、表面力が作用しない場合の円筒殻の基礎式は、図1のような直交直線座標を採用すると次のように書ける。(ただし無次元化を行なっている。)

$$\mathcal{L}U = \Delta U - 8i \frac{\partial^2 U}{\partial x_i^2} = 0 \quad (1) \quad \left[\begin{array}{l} U = \phi + i w, \phi; \text{Airyの応力関数}, w; \text{面外変位} \\ i = \sqrt{-1}, \Delta = \frac{\partial^2}{\partial x_1^2} + \frac{\partial^2}{\partial x_2^2}; \text{Laplacian} \end{array} \right]$$

また、本問題の基本解の定義と基本解は次の通りである。

$$\mathcal{L}G(X, Y) = -\delta(X, Y) \quad (2) \quad \left[\begin{array}{l} X = X(X_1, X_2), Y = Y(Y_1, Y_2) \\ \delta(X, Y); \text{Diracのデルタ関数} \end{array} \right]$$

$$G(X, Y) = \frac{1-i}{8\pi} \int_0^n \sinh((1+i)Z) K_0((1+i)\sqrt{Z^2+Y_2^2}) dZ + \frac{i}{4\pi} \int_0^n K_0((1+i)|Z|) dZ \\ + \frac{1-i}{8\pi} |r_n| K_1((1+i)|z|) \quad (3)$$



$$[K_n; n \text{次の変形ベッセル関数}, r_n = X_\alpha - Y_\alpha]$$

図1 座標、領域、単位ベクトル

開孔部の自由境界条件は、応力関数 ϕ および面外変位 w により次のように表わされる。

$$\frac{\partial^2 \phi}{\partial t^2} = 0, \frac{\partial^2 \phi}{\partial n \partial t} = 0, \Delta w - (1-\nu) \frac{\partial^2 w}{\partial t^2} = 0, \frac{\partial \Delta w}{\partial n} + (1-\nu) \frac{\partial}{\partial s} \left(\frac{\partial^2 w}{\partial n \partial t} \right) = 0 \quad (4)$$

3. 積分方程式法による開孔問題の定式化

母線方向 (X_1 方向) の無限遠で、外力(たとえば引張り)を受ける円筒殻を考える。説明の都合上、開孔前の諸量は右肩に 0 を付し、開孔後の諸量は何も付さずに示す。さうに、開孔後と開孔前の差は右肩に 1 を付して示す。また、図1に示すように、開孔の境界を ∂D 、内部を D_- 、外部を D_+ とする。

U^0 はシェル全領域 ($D_- \cup \partial D \cup D_+$) で、 U^1 は開孔の外部領域 (D_+) で(1)式を満足することを考慮し、 U^1 に対してGreenの外部表現、 U^0 に対しては内部場 (D_-) の外部表現を用いることにより、次式を得る。

$$U^1(x) = \int_{\partial D} h^1 \cdot \underline{n} ds_y \quad x \in D_+ \quad (5) \quad , \quad 0 = - \int_{\partial D} h^0 \cdot \underline{n} ds_y \quad x \in D_+ \quad (6)$$

(5), (6)式より、本問題の解ひの積分表示は次式で表わされる。

$$U(x) = U^0(x) + U^d(x) = U^0(x) + \int_{\partial D} h^d \cdot n \, ds_y + \int_{\partial D} h^0 \cdot n \, ds_y = U^0(x) + \int_{\partial D} h \cdot n \, ds_y \quad x \in D_+ \quad (7)$$

(5), (6), (7)式において、 \underline{h}^* は次式で定義されるようなベクトルである。 $(U^* = U^0 \text{ or } U \text{ or } U^d)$

$$\underline{h}^* = G \nabla (\Delta U^*) - (\Delta U^*) \nabla G + (\Delta G) \nabla U^* - U^* \nabla (\Delta G) - 8 i (G \frac{\partial U^*}{\partial x_1} - U^* \frac{\partial G}{\partial x_1}) \underline{e}_1 \quad (8)$$

$$[\underline{e}_x; x_1 \text{ 方向の単位ベクトル}, \nabla = \underline{e}_1 \frac{\partial}{\partial x_1} + \underline{e}_2 \frac{\partial}{\partial x_2}; \text{Nabla}]$$

ここで境界条件(4)式を考慮することにより、次の境界積分方程式系が構成できる。

$$F_l^0(x) = a_{l1} F_1(x) - \int_{\partial D} \sum_{m=1}^4 K_{lm}(x, y) F_m(y) \, ds_y \quad x \in \partial D \quad (l = 1, 2, 3, 4) \quad (9)$$

$$\left[\begin{array}{l} F_1^0 = \partial^2 \phi / \partial t^2, F_2^0 = \Delta \phi^0, F_3^0 = \partial w / \partial n, F_4^0 = \partial w / \partial t, \\ F_1 = \partial \Delta \phi / \partial n, F_2 = \Delta \phi, F_3 = \partial w / \partial n, F_4 = \partial w / \partial t, K_{lm}(x, y); \text{積分核 (省略)} \end{array} \right]$$

本問題は、(9)式および次式で表わされる多連結領域における適合条件式を満足する F_l を求めることに帰着する。

$$\int_{\partial D} (F_1 + 8n_1^2 F_3 + 8n_1 t_1 F_4) \, ds_y = 0, \quad \int_{\partial D} (y_2 F_1 - n_2 F_2 + 8y_2 n_1^2 F_3 + 8y_2 n_1 t_1 F_4) \, ds_y = 0 \quad (10)$$

$$\int_{\partial D} (y_1 F_1 - n_1 F_2 + 8y_1 n_1^2 F_3 + 8(y_1 n_1 t_1 - y_2) F_4) \, ds_y = 0 \quad \left[\begin{array}{l} t_a; \text{単位接線ベクトル} \underline{n} \text{ の} \alpha \text{ 成分} \\ n_a; \text{単位法線ベクトル} \underline{n} \text{ の} \alpha \text{ 成分} \end{array} \right]$$

4. 数値解析

離散化に用いた周期3次Bスプライン関数および、離散化の手順は当日報告させていただく。ここでは、引張力をうける場合について、円孔(図2)、椭円孔(図3)の膜応力および曲げ応力を示す。

円孔の場合において、Van Dykeの級数解¹⁾と良く一致していることがわかる。なお、計算時間につけても、Gauss積分と比較した結果、スプラインを使用の有効性が確かめられていく。

参考文献 1) Van Dyke, P.; Stresses about a circular hole in a cylindrical shell, AIAA Journal, vol. 3,

pp. 1733-1742, 1965.

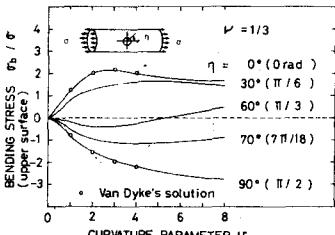
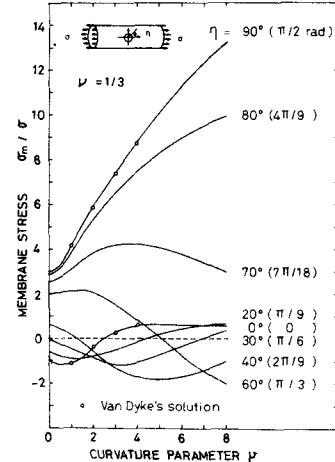


図2 曲率パラメータによる応力の変化

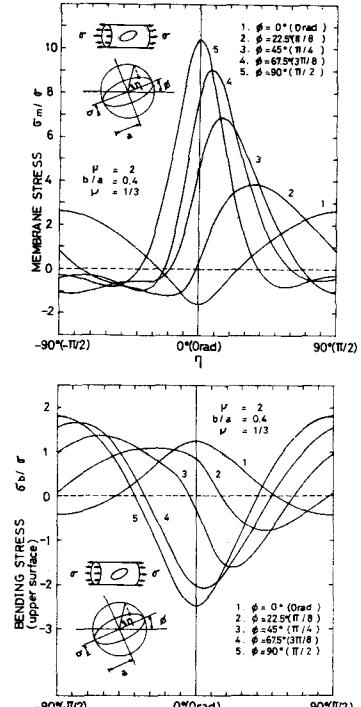


図3 孔の周上の応力分布